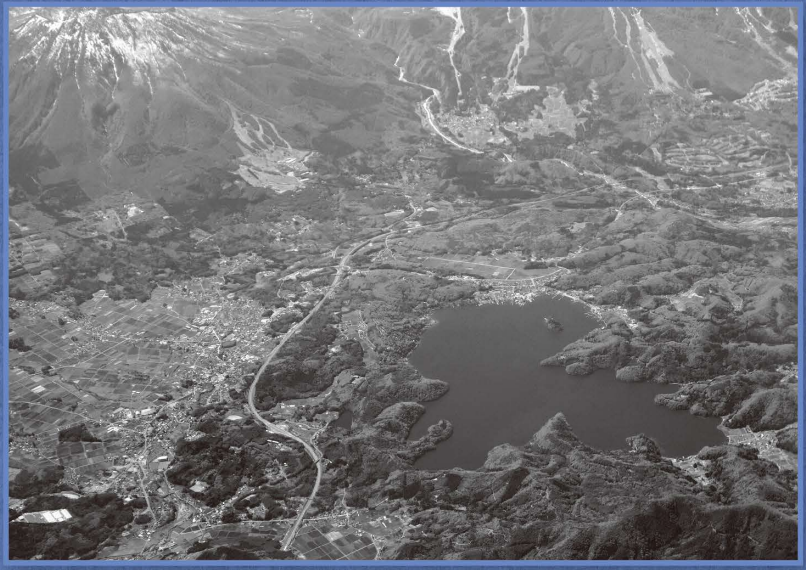
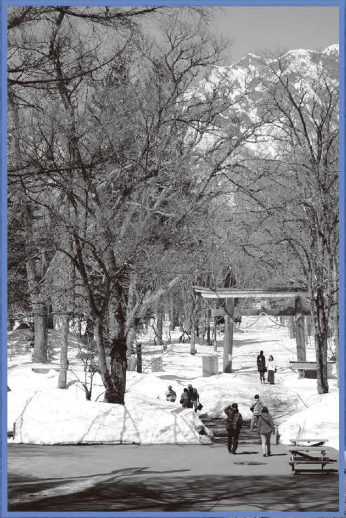
秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

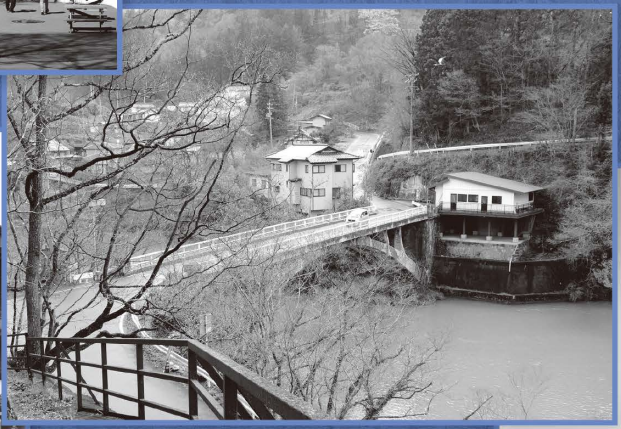
真澄

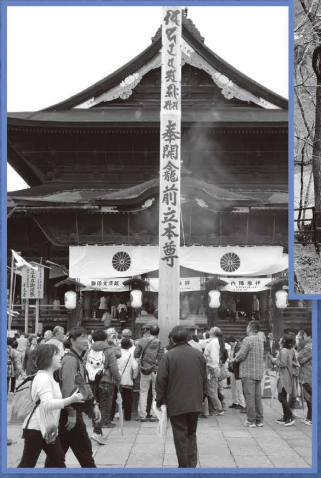
MASUMI

No.33





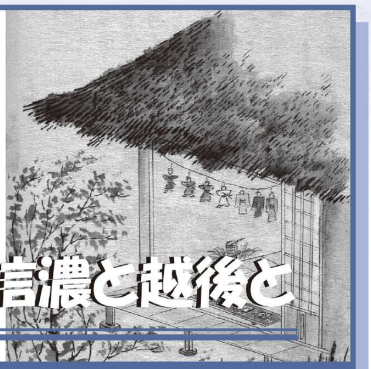




「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第６７回企画コーナー展

真澄の旅、信濃と越後と



平成27年　7月18日（土）～ 8月30日（日）

本展では、菅江真澄による信濃と越後（現在の長野県と新潟県）における一年半の旅を紹介しました。天明三年（一七八三）二月、故郷三河国（現在の愛知県東部）を旅立った真澄は、三河の北に位置する信濃に入り、翌年七月まで本洗馬（塩尻市）に滞在します。真澄に旅の初めからさらなる北行の意志があったかは不明ですが、本洗馬で、北に向かう自信と覚悟を身につけたことでしょう。人々との交流にそのことを読み取ることができそうです。また、越後の旅は一ヶ月半に及びますが、その時期の日記は不明のため、後年の記録から推測することになります。

展示では、真澄の初期の旅を概観しながら、初々しい文人としての記録を見ていただきました。真澄を片手に信濃や越後を巡ってみるきっかけになれば幸いです。

※越後の旅は、一枚のパネル展示としたため、本紙での紹介は割愛しています。

伊那の中路

◆信濃に入り、本洗馬（塩尻市）を本拠に小旅行

・天明三年（一七八三）三月半ば～十二月十五日の日記。

・信濃国に入って伊那谷を北上した真澄は、一年ほど本洗馬で長逗留することになった。洞月上人や医師の可児永通らの働きかけがあったと考えられている。その間、現在の松本市の寺社を巡った。姨捨への月見行は、「わがこころ」の書名で一冊にまとめた。

展示パネルで紹介したエピソード

①桜満開の飯田を描く
②古代の鈴への関心
③長興寺住職・洞月上人との再会
④浅間山の噴火を記録する
⑤七夕に人形を下げる
⑥沙田神社の御柱祭

①桜満開の飯田を描く

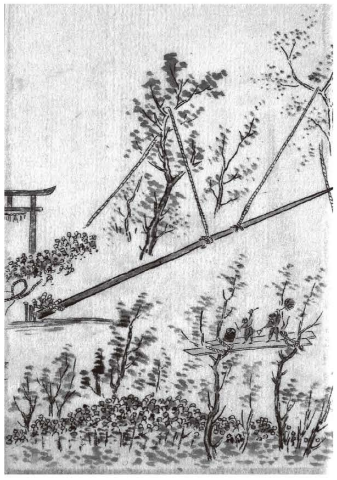
風越山は飯田（飯田市）を代表する山で、古くから修験道の道場として知られている。真澄は『詞花集』に入集した藤原家経の「風越の峯のうへにて見るときは雲は麓のものにてありける」を、図絵に書き添えた。桜の花の盛りを詠った歌である。歌枕の証歌として知られるこの歌の情景に、真澄の眼前の景色があまりにも似ていたためであろう。「菅江真澄遊覧記」のはじめをかざる、記念すべき図絵となっている。

④浅間山の噴火を記録する

浅間山は、天明三年七月六日から三日間にわたる大噴火と、それによって引き起こされた火砕流と土石流によって、千六百人を超える死者を出した。その時、真澄は本洗馬（塩尻市）にいた。七月二日は何事かと書物を読む手を休める程度であったが、八日は、夜中から噴火の音を聞き、幾重もの山を越えて、噴煙が高く上がるのを見た。噴石や降灰による被害のことも記録している。

⑥沙田神社の御柱祭

諏訪地方の神社では、四本の御柱を立てる式年御柱祭がおこなわれる。諏訪大社の四社（上社の本宮・前宮、下社の春宮・秋宮）は、寅と申の六年ごとにおこなわれる。一方、信濃三の宮として信仰を集めた沙田神社は、卯と酉の六年ごとにおこなわれる。真澄が沙田神社（松本市島立）の御柱祭を記録したのは、卯年の天明三年十月二十一日のことであった。大木に大綱を掛けて御柱を引き上げるようすが描かれている。



御柱引き上げのようす（館蔵写本）

わがこころ

◆月見行の一週間

・天明三年（一七八三）八月十三日～二十日の日記。

・歌枕で有名な姨捨への月見行を、《伊那の中路》からの別冊仕立てにした。日記の最後に、月見に関する真澄と十二人の歌が記されているが、実際は熊谷直堅との二人旅であった。姨捨での月見の後、真澄らは、善光寺まで足を延ばしている。

展示パネルで紹介したエピソード

①月見までの放生会見物
②ハングル文字を教わる
③善光寺に泊まる
④真澄が記録される
⑤真澄は冠着山（姨捨山）に登ったか？

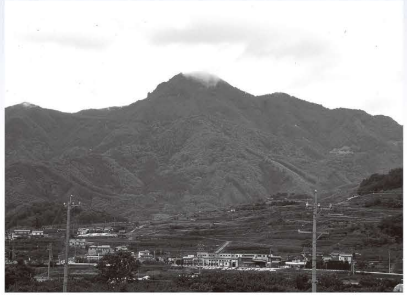
④真澄が記録される

姨捨からの帰途の村井（松本市）で、真澄は紀伊国牟婁郡田辺（和歌山県田辺市）の俳人香風と出会った。陸奥国の歌枕を巡ってきた香風から、真澄は、土産としていた「十府の菅（薦）」や「宮城野の萩」を見せてもらった。香風のこの旅の紀行文は『笠やどり』にまとめられており、そこに真澄は「三州の歌人」として登場する。同書によると、香風と真澄は十五日の月見の時にすでに出会っており、「…三州の歌人などわけて親しく成て」と記録されている。旅をする真澄が記録されたものとして貴重である。

⑤真澄は冠着山（姨捨山）に登ったか？

長野県の地図を開くと、標高一、二五二mの冠着山に「姨捨山」の別名がある。一見して、真澄が月見のために行った「姨捨」と勘違いするが、真澄が行ったのは、冠着山ではなくて、姨石のある長楽寺（天台宗、千曲市八幡姨捨）であった。月見の時を待つ間、真澄は二・五kmほど道を下った八幡宮に行き、ちょうどおこなわれていた放生会を見た後、夜の月見に備えて旅籠で昼寝をしている。更級とも呼ばれるこの地は（更級郡であった）、山あいの信濃の土地柄と合わせて、昔から姨捨伝説の地として名高かったのである。

長楽寺と境内にある姥石
姥石に登って月見をすることが「姨捨山の月見」となっていた。



冠着山（別名：姨捨山）
姨捨伝説の舞台として相応しいことからの別名であろう。

すわの海

◆諏訪湖周辺、のち伊那郡へ遊覧

・天明四年（一七八四）一月十五日～五月二十四日の日記（閏一月を含む）。

・自筆本は不明だが、写本が国立国会図書館にあり、旧蔵者によって「秀雄北越記」と仮題されている。書名については、《桜がり下》によって知られる。

展示パネルで紹介したエピソード

①諏訪大社・筒粥神事の御神託
②今井神社神官・梶原景富との交流
③鹿の頭を並べる神事
④曾我兄弟の仇討ち、その後
⑤木々の中に高遠城を見る
⑥臼杵の宮を詣でる

③鹿の頭を並べる神事

真澄は、諏訪大社・上社前宮でおこなわれた御頭祭について、神事のようすを、順を追って丁寧に記録している。十間もある直会殿には、鹿の頭が七十五（《粉本稿》では七十二）も並べられた。この中に耳割け鹿があるのは、神矛によって仕留められた鹿とされた。

真澄は、この時のことを《粉本稿》に三図描くが、この内の二図には、御頭祭の神事の供物や道具などを描いている。

《粉本稿》
（大館市立中央図書館蔵）

くめじの橋

◆北信濃をめぐって越後へ

・天明四年（一七八四）六月三十日～七月三十日の日記。

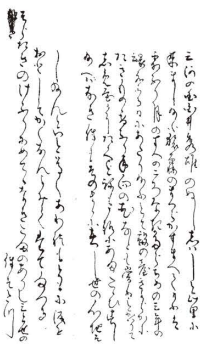
・一年余りを過ごした本洗馬を出立し、越後国に入るまでの日記。その途次、安曇野から大町、犀川沿いに長野に入り、その後、戸隠神社にも寄っている。

展示パネルで紹介したエピソード

①真澄を敬慕した三溝政員
②真澄は良寛と会ったか？
③薄大明神を詣でる
④松本城を見る
⑤とありおとしの橋、真澄も渡れず
⑥歌枕・くめじの橋を渡る
⑦戸隠神社の祭神と地名由来
⑧のちの小林一茶の弟子と連句を交わす

①真澄を敬慕した三溝政員

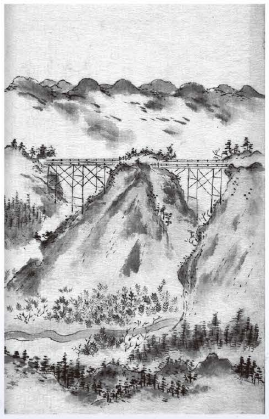
真澄は本洗馬（塩尻市）を旅立って北行するが、真澄との別れを惜しみ、見送りのために三日間同行したのが三溝政員であった。真澄と政員との歌の贈答などは「政員の日記」に著されており、真澄が記録された点で貴重である。後年、政員は本洗馬で寺子屋の師匠となり、村の子女の教育に尽力したと伝えられる。



三溝政員の日記は、昭和4年、真澄遊覧記刊行会『わがこころ』校訂本で紹介された。

⑤とありおとしの橋、真澄も渡れず

現在の池田町に着いた真澄は、深い谷に架けられた「とありおとしの橋」を見に出かけた。さすがの真澄も、案内の翁に助けられながら、半分まで渡ったところで引き返すほどの怖さだった。恋敵の二人の女がこの橋にやって来て、その内の一人が橋から相手を突き落とそうとしたところ、縫い合わされた着物の袖で、二人もろともに落ちたという、橋の命名由来譚を真澄は記している。



（館蔵写本）

とありおとしの橋
（登波離橋・とばりばし）

⑧のちの小林一茶の弟子と連句を交わす

真澄は越後（新潟県）に入る前日、北国街道の野尻宿に泊まった。ここでは、俳諧を愛好する湖光が訪ねてきて、真澄と連句を交わしている。湖光は旅籠屋主人・石田津右衛門で、後年の文化年間、この地で小林一茶の弟子になる人物である。野尻湖は現在、ナウマンゾウなどの発掘調査で有名な所である。真澄は翌日、峠で野尻湖を見渡している。

第６８回企画コーナー展

内田文庫の貴重資料

平成27年　10月24日（土）～ 12月20日（日）

内田武志（一九〇九～八〇）は、病床にありながら、生涯にわたって真澄研究に取り組んだ人物です。その成果は、数多くの著作や論考として結実しました。とりわけ、十年をかけて刊行に取り組んだ『菅江真澄全集』（未来社刊）は、現在でも真澄研究の礎（いしずえ）であり、指針ともなっています。

当館は、武志の研究を支えた妹内田ハチさん（一九一三～九八、元秋田大学助教授）から、菅江真澄資料センター開設前年の平成七年（一九九五）、研究資料や原稿、書籍などの寄贈を受けました。そのうち、書籍類の一部については、すでに公開しています。

また、平成二十二年度と平成二十四年度には、内田家の関係者からも資料の寄贈を受けました。当館では、これらを「内田文庫」と総称しています。

本展では、「内田文庫」及び「菅江真澄研究所」関連資料から、真澄研究の上で貴重となる資料を紹介しました。

1 初期出版物と素材

武志による初期の出版物は、『秋田叢書（そうしょ）』に収められた真澄著作物からの語句の拾い出しや、特徴的な記述の抜き出しとなりました。また、真澄著作物の概略の紹介もおこなっています。戦後の出版事情を考えると、真澄の普及にかける武志の熱意が伝わってきます。

『菅江真澄未刊文献集一』『同二』では、大館の栗盛（くりもり）教育団が所蔵していた、いわゆる「大館本」（現在の大館市立中央図書館蔵本）を中心とする未刊文献の翻刻がおこなわれました。それに附された解説と年譜などは、それまでの武志による真澄研究の到達点となりました。

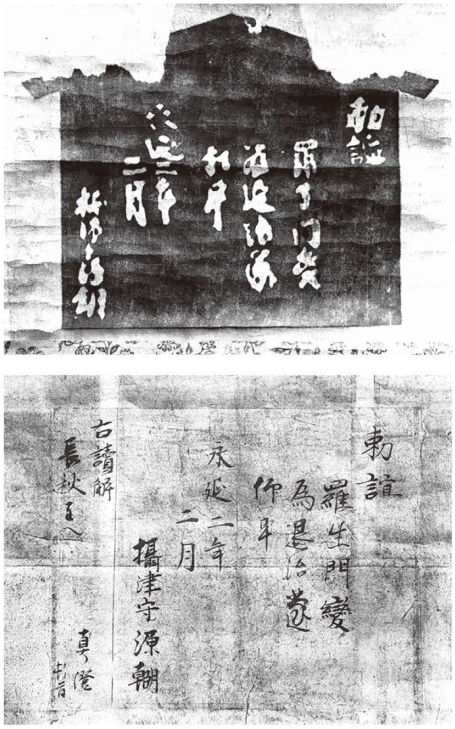
〈展示資料〉
- ○『真澄遊覧記総索引 歳時篇』
- ○『秋田の山水』（野菊叢書1）
- ○『菅江真澄の日記』（野菊叢書2）
- ○『松前と菅江真澄』
- ○八甲田山に関するメモ書き
- ○『菅江真澄未刊文献集一』、『同二』
- ○真澄自筆本の書写原稿　ほか

八甲田山に関するメモ書き（カード様式）
八甲田山に関する文章や語句が『秋田叢書』から抜き書きされ、そのメモが封筒に入れられて整理された。

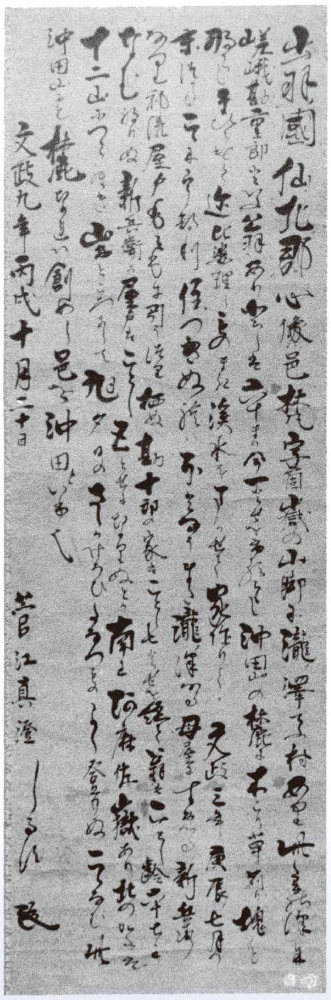
2 失われた資料と不明資料

内田文庫には、調査の後に焼失したり、所在不明になったりした資料の写真や複写物があります。そのため、内田文庫にあるそれらの記録が、現在、内容を確認できる唯一のものになっています。今となっては、原本に代わる大事な資料といえます。

〈展示資料〉
- ○高階貞房宛本居大平（もとおりおおひら）書簡写し
- ○高階貞房宛氏家直英（うじいえなおひで）書簡写し
- ○風の落葉三・表紙裏打ち紙
- ○鳥屋長秋（とやのながき）宛呪符読解（写真パネル）
- ○軸装「沖田邑由来」（写真パネル）
- ○津軽五資料（写真パネル）



「鳥屋長秋宛呪符読解」の写真
内田文庫に２枚の写真がある。読み解き難い文字の影印が貼られた掛軸について、真澄が読み解き、それを鳥屋長秋に伝えた資料である。その掛軸の表裏をそれぞれに撮った写真と思われる。真澄の解読によると、鬼退治で有名な源頼光の文言として、「勅命を受けて、羅生門の変化（へんげ）を退治した」と書かれているとしている。悪霊（あくりょう）除けの呪符（じゅふ）として使われた掛軸だったのだろうか。



軸装「沖田邑由来」の写真
『菅江真澄全集』第十二巻に断簡(70)として収められている資料の写真。資料調査の後、所蔵者宅の全焼で資料も焼失してしまったことから、本写真は貴重なものとなっている。

3 県外研究者からの便り

真澄研究に関しては、秋田県内に圧倒的な数の資料があるとはいえ、真澄の若年時代や他地域の旅については、当該地域に住む研究者が持つ確かな知識や情報が何よりも頼りになります。

武志や妹ハチに対して県外からもたらされる情報は、真澄の生まれ故郷の愛知県をはじめ、長野県や東北、北海道など真澄の旅の足跡が残る地域からとなりました。これらは、特に、『菅江真澄全集』別巻一に収められた「菅江真澄研究」の各論の参考とされました。書簡やハガキは大事に保管されています。

〈展示資料〉
（展示資料の差出人は、いずれも物故された方です）
○青森県弘前市・森山泰太郎書簡
○岩手県一関市・八巻一雄書簡
○愛知県岡崎市・新行和子書簡
○長野県塩尻市・田村岩雄書簡
○愛知県西枇杷島町・水谷源二郎書簡

4 資料の情報収集

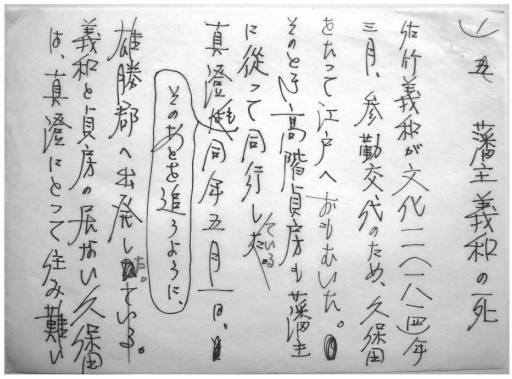
武志の真澄研究には、広範な資料収集が欠かせませんでした。『菅江真澄全集』の刊行には、それまで翻刻されていなかった資料の披見・確認は欠かせなかったことです。写真はもちろんのこと、当時普及し始めていたコピーで、それら資料の収集がおこなわれました（※現在は、資料保護のためにコピーはおこなわず、写真撮影をするのが基本です）。

参考とする資料は、原本を所蔵する図書館から取り寄せ、また、真澄自筆の資料（写本を含む）は、当該地域の研究者からの協力を仰いでいます。

5 原稿の数々

内田文庫には、数多くの原稿やメモ類があります。武志が真澄研究を始めた昭和二十年代は、武志の原稿にはまだ力強さが見られますが、やがて、太いサインペンで軽い紙に書いた原稿が目立つようになります。これは病気（血友病）のために、武志がベッドに横たわったまま原稿を書いていたためです。武志の原稿を整えて清書するのは、妹ハチをはじめとする家族、それに研究支援者たちでした。雑多ともいえる原稿やメモ類は、兄武志の業績をまとめようとしていた妹ハチによって、ある程度分類されています。

〈展示資料〉
○「草園」第二十五号（鳥屋長秋関係の論考）
○内田武志執筆原稿
○清書原稿

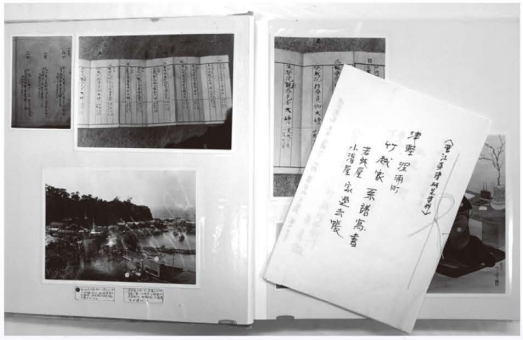


『菅江真澄全集』解題用の武志自筆原稿
全集解題用の原稿は、薄い紙にサインペンで書かれた。これは、武志がベッドに横たわった姿勢で執筆したためである。

6 菅江真澄研究所の活動

昭和二十一年、『菅江真澄遊覧記索引 歳時篇』の発行に際し、武志は、菅江真澄研究会の設立を高らかに謳いました。しかし、実際の活動を確認できるのは昭和四十四年の真澄没後一四〇年祭前後からで、名称も「菅江真澄研究所」となっています。真澄没後一四〇年祭は、昭和四十年～昭和四十三年に『菅江真澄遊覧記』（平凡社東洋文庫）が刊行されていたこともあり、多くの人が参加しました。また、昭和四十五年三月には、「菅江真澄研究所報告」第一号が八頁構成で発行されました。これは翌々年（昭和四十七年）七月の第四号発行で終わってしまいますが、その後も研究支援者たちは「菅江真澄研究所」の名で資料調査をおこない、随時、武志への報告がおこなわれました。

〈展示資料〉
○菅江真澄研究所関係アルバム
○「菅江真澄研究所報告」第二号　ほか



菅江真澄研究所関係アルバム
武志の資料調査を手伝った鷲谷良一氏が作成したアルバム。真澄没後140年祭、同150年祭のほか、資料に関する情報が綴じ込まれている。

7 「内田文庫」の遺墨資料

武志は病床にあったため、真澄の自筆資料を直接目にする機会はそれほど多くはありませんでした。そのため、所蔵者が自宅に資料を持参すると、とても喜んだそうです。

武志が真澄研究を進める中で、資料の散逸をおそれたり、じっくりと研究を進めたりするために資料を入手したことがあったと思われます。「内田文庫」の中には、真澄の遺墨資料（写本を含む）が含まれています。

〈展示資料〉
○短冊「折山吹」
○短冊「春風解氷」
○無題雑葉集
○久保田の落ち穂
○断簡「花の出羽路秋田郡」

短冊「春風解氷」（秋田市・鷲谷良一氏寄贈）
霜むすぶ柳のいとも春風にとくればとくる池のうすらひ　真澄

企画展　新着・収蔵資料展

未見！発見！秋田県！

真澄部門（菅江真澄資料センター）

近泰知 著

『植田の話』と真澄

平成27年 11月14日（土）～ 平成28年 4月3日（日）

一九八五年（昭和六十）、秋田文化出版社から『植田の話』という本が出版されました。

現在の横手市十文字町植田に生まれた近泰知（こん・たいち、一八七一～一九五四）が、小学校教員をしていた明治二十年代から同三十年代にかけて、地元の植田とその周辺地域について、現在でいう郷土史を記録しました。『植田の話』は、泰知の稿本を、十文字地方史研究会が翻刻出版したものです。

出版本に「出羽実録」と冠せられたように、泰知の記録は、歴史・風俗・産業など広範囲にわたります。また、一つの地域を絵と文で詳細に記録した資料として、出版当時から評価されてきました。

『植田の話』は「菅江真澄遊覧記」からの影響が大きいことから、平成二十四年、稿本十八冊が泰知の御子孫から寄託資料として当館に預けられました。『植田の話』の稿本十八冊は、本展が初めての公開になりました。

『植田の話』とは

稿本・本編巻一などの冒頭にある「著者の弁」によると、明治二十一年（一八八八）、近泰知が小学校助手になったのを機に「植田の話」の編纂に着手し、明治三十七年（一九〇四）、十七年間勤務した小学校を退職するまでに、一応の完成をみたとしています。

一方で、参考文献として、昭和初期の刊行本である『秋田叢書』を挙げていることや、内容に昭和十年代の事柄が書かれていることなどから、泰知が幾度も補筆したことがわかります。

執筆が長年にわたっていることから、事柄の年代が特定できないことも一部に見られますが、それでも、生まれ故郷を確かな眼力で記録した、優れた郷土史としての評価には変わりありません。

何度も書き直されている原稿をみると、郷土を記録しておこうという泰知の熱意が感じられます。

原稿や資料は十八冊の稿本としてまとめられています。その内の三冊は、総集編としてまとめようとしたものですが、それらは未完に終わっています。泰知は亡くなる直前まで、自らの手での出版を夢見ていたようです。

※稿本には、出版本で翻刻されなかった部分が数多くあります。

※本展における用語と表記について

稿本…近泰知がまとめた冊子十八冊（本編十五冊、総集編三冊）

出版本…十文字地方史研究会が翻刻出版した『出羽実録　植田の話』

『植田の話』…稿本か出版本かの区別なく、内容そのものを指す。

『植田の話』稿本十八冊

総集編３冊（上・中・下巻）

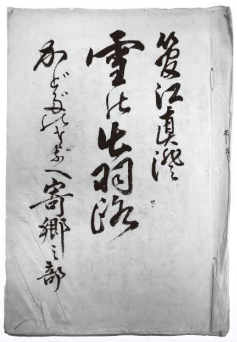
本編15冊（巻一～巻十五）

真澄著作からの影響

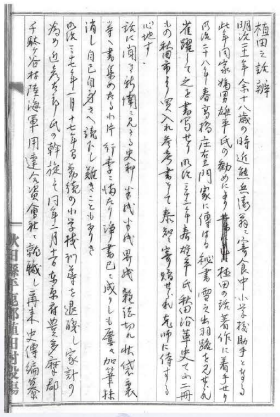
近泰知が『植田の話』を執筆することになった直接の要因は、小学校助手になった十八歳の時（明治二十一年）、親類の近雄平から執筆を勧められたことによります。

泰知は、古文書・刊行本・新聞などを参考にして執筆をしていく中で、特に、二つの文献に大きな力を得たとしています。

一つは、菅江真澄の地誌《雪の出羽路平鹿郡》でした。「著者の弁」（植田之話辨）によると、「秘書『雪の出羽路』を見せられ雀躍して之を書写せり」としています。もう一つは、橋本宗彦の『秋田沿革史大成』（明治二十九年出版）でした。泰知は、「実在の老師に侍する心地す」と高く評価しています。



筆写本『雪の出羽路』
近泰知が明治28年、《雪の出羽路平鹿郡九》を「雀躍して之を書写せり」と記した、筆写本そのものである。平成12年、当館に寄贈となっていた資料である。



本編巻二にある「著者の弁」
（植田之話辨）

『植田の話』、菅江真澄遊覧記からの引用

『植田の話』には、植田とその寄郷十二村が記された《雪の出羽路平鹿郡九》と、その他の真澄著作からの引用が見られます。雄勝郡の地誌からの引用は、それが初めて翻刻された『秋田叢書』（昭和初期刊行）からと考えられます。出版本では、四十一箇所の「菅江真澄遊覧記」からの引用が確認できます。

稿本・本編巻五
多宝院（古四王神社などの別当）の来由や宝物についてまとめた部分の絵

《雪の出羽路平鹿郡九》（館蔵写本）
多宝院宝物の能楽面を描いた図絵

展示パネルから

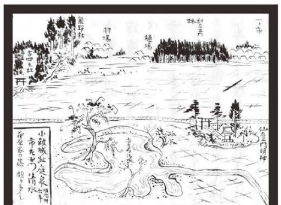
展示パネルでは、テーマを設け、稿本・本編巻一～巻十五から絵を中心にして紹介しました。ここに示す「植田の風景」「災害の記録」の他に、「産業の記録」「土器・石器の記録」をまとめました。

植田の風景

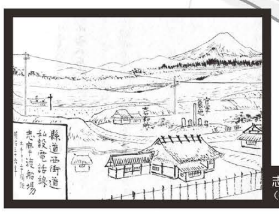
『植田の話』では、さまざまな事柄を記録する中に、集落のようすが描き出されています。

1 木下・二荒神社（現、日光神社か）

2 源太左馬・石川原



3 小鼓城跡（明治３６年）



4 志摩渡船場（明治３６年）

7 越前村神明社（明治２３年）

6 護国寺

5 古四王神社（明治３０年）

災害の記録

『植田の話』には、植田村に起きた災害のことが記録されています。ともすると、私たちは災害に関して、早く忘れてしまいたいために、眼をそむけがちになります。泰知は、記録することで後世にその悲惨さを伝え、人々が自らの命と財産を守ることを願ったのでしょう。

落雷

人家への落雷は珍しかった。屋根にあった「足代鉄」に落雷し、その雷が４方向に分かれて地面に抜けていった。これは、雷が通った焦げ跡から知られた。洋刀（サーベル）を通った雷は、そばに座っていた巡査の目の前に数百もの火花を散らし、巡査は一時気を失った。（明治３７年）

洪水

明治２７年８月２５日、皆瀬川の土手が決壊し、植田村のーッ屋、志摩付近は軒下まで浸水した。夕方になってからの救援（炊き出し）は、筏を組んでおこなわれた。植田村の流失家屋は２軒だったが、平鹿郡内、雄勝郡内の被害は甚大であった。

火災

明治７年旧４月９日午後五時頃、小屋２棟（図の○印）から同時に出火、南東からの強風のために延焼、２時間後に鎮火した。この火事で、家屋１４軒、土蔵１棟、小屋８棟が焼失した。死傷者はなく、馬もすべて曳き出された。
この火事では、火の通り道だったのにもかかわらず、高橋庄右衛門の家屋が火災から免れた。「積善の家に余慶あり」と言われた。

明治２９年８月３１日～９月１２日は、暴風、大地震、洪水が相次いだ。

地震

万歳楽（まんざいらく、厄除けの詞）でのまじない

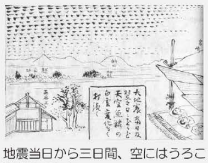
＊ 陸羽地震…M7.2、震源は真昼山地直下10km、最大震度６。現在の美郷町内では、集落の７割以上の家屋が全半壊した。この地震で、千屋断層ができた。死者209人。

暴風

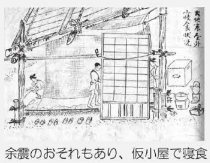
地震のあった８月３１日に暴風があり、屋根の木鞍が吹き飛ばされた。９月１２日にも再び暴風があった。

洪水

９月９日、皆瀬川の土手決壊（植田村志摩）。



地震当日から三日間、空にはうろこ雲が出ていた。（※仮小屋の中で寝る家族が描かれている）



余震のおそれもあり、仮小屋で寝食した。（※寝であるため蚊帳が見える。あんぢに小便をさせるようすも描かれている）

建物の壁が崩れて煙を上げ、堰の水が揺れて道路に上がった。（※飛び出した人は、倒れないように両手を広げている）

真澄クイズに挑戦！

第六十七回企画コーナー展「真澄の旅、信濃と越後と」では、信濃にかかわる四つの著作について、それぞれ三問のクイズを出題し、答えを解説資料に示しました。ここでは、それぞれ二問ずつの計八問を再掲します。

真澄クイズは、真澄の著作を楽しむきっかけになればとの考えで作成しています。

《伊那の中路》クイズ

Q1…風越山（飯田市）の桜が散るのを見て、真澄は西行法師の歌を思い出しました。何という歌集に入っている歌でしょうか。

①万葉集　②古今和歌集　③山家集

Q2…真澄は道行く人から、人に憑き、物の怪となって人を狂わせる生き物のことを聞きました。何と呼ばれていたでしょうか。

①かまいたち　②むじな　③くだぎつね

答え

A1…③山家集　＊西行法師は平安末期・鎌倉初期の歌人で、生没年は一一一八～九〇。『古今和歌集』の成立は平安初期の九一二年頃とされる。また、『万葉集』は奈良時代の歌が主になっている。真澄は『山家集』にある「風越のみねのつづきに咲花はいつ盛ともなくて散らん」を書いている。

A2…③くだぎつね　＊「かまいたち」は、皮膚に鎌で切ったような鋭い傷ができる現象をいう。「むじな」は、伝承中に化け物として出てくるが、人に取り憑くものとしては、やはり狐であろう。

《わがこころ》クイズ

Q1…真澄は姨捨伝説を紹介するために、ある物語を引用しています。何という物語でしょう。

①源氏物語　②伊勢物語　③大和物語

Q2…現在の長野市篠ノ井付近でのことです。真澄が土地の名を娘に聞くと、娘は家の中に逃げ込みました。それはなぜでしょう。

①言葉が通じなかった　②地名が変わっていた　③不審者だと思われた

答え

A1…③大和物語　＊『大和物語』の第百五十六段にある姨捨伝説が、「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て」の歌とともに、広く知られていた。

A2…②地名が変わっていた　＊これは読まなくては答えがわからない。娘のようすを見ていた土地の人が、「ここは屁窪（へくぼ）だから」と言った。真澄が屁窪と表記した場所は、現在の長野市篠ノ井塩崎平久保という。

《すわの海》クイズ

Q1…真澄は諏訪湖から帰るとき、お神渡りを見たとしています。諏訪湖のお神渡りとは、どんな現象でしょうか。

①氷が割れて湖面が見える　②氷が盛り上がる　③夕陽が一本道のように見える

Q2…真澄が北小河内（箕輪町）の原家に行くと、家の主人がこの建物は古いと言いました。真澄は何を見て、なるほどと思ったでしょうか。

①鉈目が荒々しい　②萱屋根に草が生えている　③建物の部材が太い

答え

A1…②氷が盛り上がる　＊諏訪湖が全面凍結した際、裂け目の氷が持ち上げられる現象をいう。

A2…①鉈目が荒々しい　＊《おがらの滝》では、古建築の家を見て、どこにも鉋（かんな）で削ったところが見えないとしている。真澄は、製材の仕方を、古建築かどうかを見る目安としたようだ。

《くめじの橋》クイズ

Q1…くめじの橋の最後に、「越後国には来たが、夢は信濃国の山路を見ている」を意味する歌を真澄は詠んでいます。信濃にかかる枕詞は何でしょうか。

①うちよする　②みすずかる　③しきしまの

Q2…善光寺に行く途中、真澄は松代の駅に宿りました。ここは、六文銭の家紋で知られる松代藩の城下町でした。藩主は何家でしょうか。

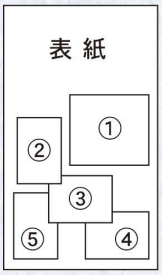
①真田家　②松平家　③前田家

答え

A1…②みすずかる　＊「うちよする」は駿河、「しきしまの」は大和の枕詞。「みすずかる」の「み」は接頭語、「すず」は篠竹を意味する。万葉集にある「水薦（みこも）かる」を、近世、間違いだとして「みすずかる」と訓んだことから成立した。

A2…①真田家　＊戦国末期に上田城を開いた真田氏は、関ヶ原の合戦では兄弟が東西に分かれて戦った。東軍についた兄の信幸（のぶゆき）（のち信之）は、そのまま上田藩主となったが、やがて松代に移封され、幕末まで続いた。

表紙



編集後記（表紙解説も兼ねて）

・展示調査にかこつけて、昨年の雪解け時期から何度か長野を回った。北陸新幹線の開業もあって、東京からの車中は混んでいた。起点とした諏訪湖で、今にも散り始めるかのような桜満開の時期、清々しい湖畔を毎朝散歩したことが忘れられない。真澄の足跡を追うには、地図で地名を確認しながらおこなうが、やはり、地形や距離感などは現地を訪ねてみなくてはわからない。現地に身を置きながら真澄の文章を読んでみるのが、真澄を学んでいての最高の贅沢だと思う。現地を訪ねると、初めてわかることがいくつも出てくる。それらについては、企画コーナー展「真澄の旅、信濃と越後と」やセンターだより「かなせのさと」で紹介した。取材旅行で撮影し、展示にも使用した写真を表紙に使っている。①野尻湖（過日、伊丹空港行航空機から撮影）、②戸隠神社奥宮入口、③久米路橋（長野市信州新町）、④松本城、⑤善光寺（７年に一度の御開帳）である。さて、今年は「真澄片手に」どこへ行きましょうか。（松山）

真澄 MASUMI No.33

発　行　日◎平成28年3月18日
編集・発行◎秋田県立博物館 菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳥崎字後山52
TEL.018-873-4121（代）